

拙著『フランス再興と国際秩序の構想—第二次世界大戦期の政治と外交』（勁草書房、2016年）について

この度は私の研究を紹介させていただく機会を賜り、厚く御礼申し上げます。

博士論文を土台に執筆した本書で扱ったテーマは第二次世界大戦期の「フランス」です。なぜ国名に括弧を付けたのかといえば、開戦してからそれほど時間を経っていない1940年6月、第三共和制のフランスは早々とドイツ、並びに途中から参戦したイタリアに敗れてしまったからです。そして、独伊両国との休戦協定締結を推進し、第三共和制最後の首相を務めたペタン（Philippe Pétain）元帥率いるヴィシー政府、そしてペタンに反発し、イギリスのロンドンで抵抗運動を旗揚げし、徹底抗戦を訴えたド・ゴール（Charles de Gaulle）将軍率いる自由フランスの二つの国際政治アクターが誕生し、フランスは分裂しました。ヴィシー政府、自由フランスのいずれもが「フランスの正統な統治機構」であることを主張したため、結果的に国際政治の舞台におけるフランスそのものの地位が不安定なものとなり、「フランス」という括弧付きの存在に落ちたというわけです。

最終的に、フランスの正統なアクターとして戦後への道を切り拓くのはド・ゴールの自由フランスであり、枢軸陣営との協力の道を選んだヴィシー政府は解体されます。本書は、この自由フランスを研究対象にしたものです。自由フランスに着目した理由は、単に勝者であったということだけではありません。第三共和制の政府を形式的に引き継いだヴィシー政府が正統政府の座を持っていたため、自由フランスは、ゼロから統治機構を整備する必要があり、それを連合国内に「政府的機構」として承認されるための外交を実施する必要がありました。つまり、第二次世界大戦期の自由フランスを見ていくことで、統治機構の整備という内政、そして正統性を獲得するための外交という、政治学の分野の重要な課題を扱えるからです。

さらに、外交の面で、自由フランスは、正統性の獲得だけではなく、戦後フランスを大国として再興させるために、いかなる国際秩序が理想的か、そしてその理想を現実化させるためには何をすればよいのかという課題に取り組みました。本書が力点を置いたのはこの点です。国際秩序の構想というと、手の届かない理想を追求する夢想的な営みのように聞こえてしまうかもしれませんが、ド・ゴールを中心とした自由フランスの政治エリートは、理想を描きつつも、連合国内の権力政治を踏まえながら、その理想と向き合いました。そうした権力政治と向き合ったからこそ、最終的には連合国内を主導したアメリカが推進した普遍的国際機構の構想に自由フランスも乗ったわけですが、そこに至るまでには「西ヨーロッパ統合」構想のような「フランス」の思惑が詰まった構想もありました。

理想と現実との相克という、国際関係論の範疇に属する一大テーマについて、国際秩序の構想をめぐる政治をとおして考察した、国際秩序構想史の方法論に基づく研究です。今後も、こうした視点を踏まえて研究に邁進していく所存です。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。（宮下雄一郎）